

堀河院跡出土の「いろは歌」

http://www.kyoto-arc.or.jp
 (公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



「いろは歌」墨書土器

はじめに 平安京左京三条二坊九町および十町（現在の中区堀川通御池北東周辺）は「堀河院」と呼ばれる平安時代の貴族の邸宅跡と推定されています。北側の九町で1983年に実施した発掘調査では、平安時代後期の広大な庭園跡を検出しています。30年後の2013年、その時の資料を再調査したところ「いろは歌」を墨書した土器が出土していたことが明らかとなりました。

「いろは歌」墨書土器と出土遺構
 墨書土器は土師器の小皿（口径9.0cm、高さ1.5cm）で、裏面全体に仮名文字のいろは歌が書かれ

れます。この土器は調査区の北東部で検出した木枠の井戸（方形縦板横棧組井戸：一辺約0.9m、深さ約2.0m）から出土しました。この井戸からは「いろは歌」墨書土器のほか、土師器（皿）、須恵器（鉢）、瓦器（椀）、輸入陶磁器（白磁椀・壺、襦袢壺）などが出土しています。

墨書土器の特徴 書かれている内容が「いろは歌」であることは右から二行目の書き出しから明らかで、土器の破損により一部の文字が欠けていますが、いろは歌のほぼ全文を読み取ることができま

す。個々の文字は独立しており、皿の外面の右端から、余裕をもって書き始めていますが、徐々にスペースが狭くなり、最後の行は右端の余白に戻って書いています。「を」と「わ」の間に空間をもうけ



「いろは歌」墨書土器が出土した井戸



平安京左京三条二坊九町「堀河院」調査風景

るなど、七五調の歌としての句切れを意識して、改行、字間空けをしている部分があります。筆跡は太めでぼつりとしており、回転部分が十分に展開せず、「糸」の字などはバランスが崩れており、上手ではありません。また、「れ」と「そ」の順序を間違っていることなどから初心者の筆であると考えられます。

出土遺跡と環境 出土地の堀河院は平安時代前期の公卿藤原基経の邸宅として知られており、代々藤原氏の長者に伝領されます。平安時代中期、藤原兼通の時には円融天皇が初めて里内裏としてこの邸宅を用います。また、平安時代後期には堀河天皇が里内裏として用い、ここで崩御され、邸宅の名前が盛ともなっています。その後、中宮篤子、令子内親王の御所となっていました。安元三年（1177）に発生した大火（太郎焼亡）によって廃墟となりました。その後、堀河院の名前はしばらく記録から遠ざかりますが、承元四年（1210）の火災記事から、この頃は堀河通

と呼ばれるもので、經典の発音に使われる仮名の一般として「いろは歌」が万葉仮名で記されています。平仮名が記された考古資料としては、伊勢の富宮跡で出土した11世紀末から12世紀前半の土師器の皿が最も古いとされています。ただ、この資料は「いろは歌」の一部（9文字）が読み取れるものであり、平仮名の「いろは歌」の全文がうかがえる資料としては今回の資料が最もものと考えられます。

筆跡の未熟さや文字の転倒などから、作者は文字を書き始めた子供と推測できます。11世紀前半に記された左大臣藤原朝長の日記『台記』には10歳の三男が天皇の前で「いろは」を書いたことが記されていますが、今回の資料は、そのような手習いの事例と考えられています。また、土師器の皿に記されていることは倉宮のものと同通していますがこれが何を意味するかは今後の課題です。（吉崎 伸）



「いろは歌」トレス図および文字配列図

まむせ(十)
 いろはには(一)
 りぬるを(二)
 (ち)わか
 よ(それ)わ
 (そ)れを
 (ら)むら(む)
 (ま)けふこ
 (く)や
 (ま)てあさ
 (ゆ)めし

「いろは歌」墨書土器釈文